



平成29年度 長野県 地域発元気づくり支援金活用事業

Good Job! Exhibition in UEDA

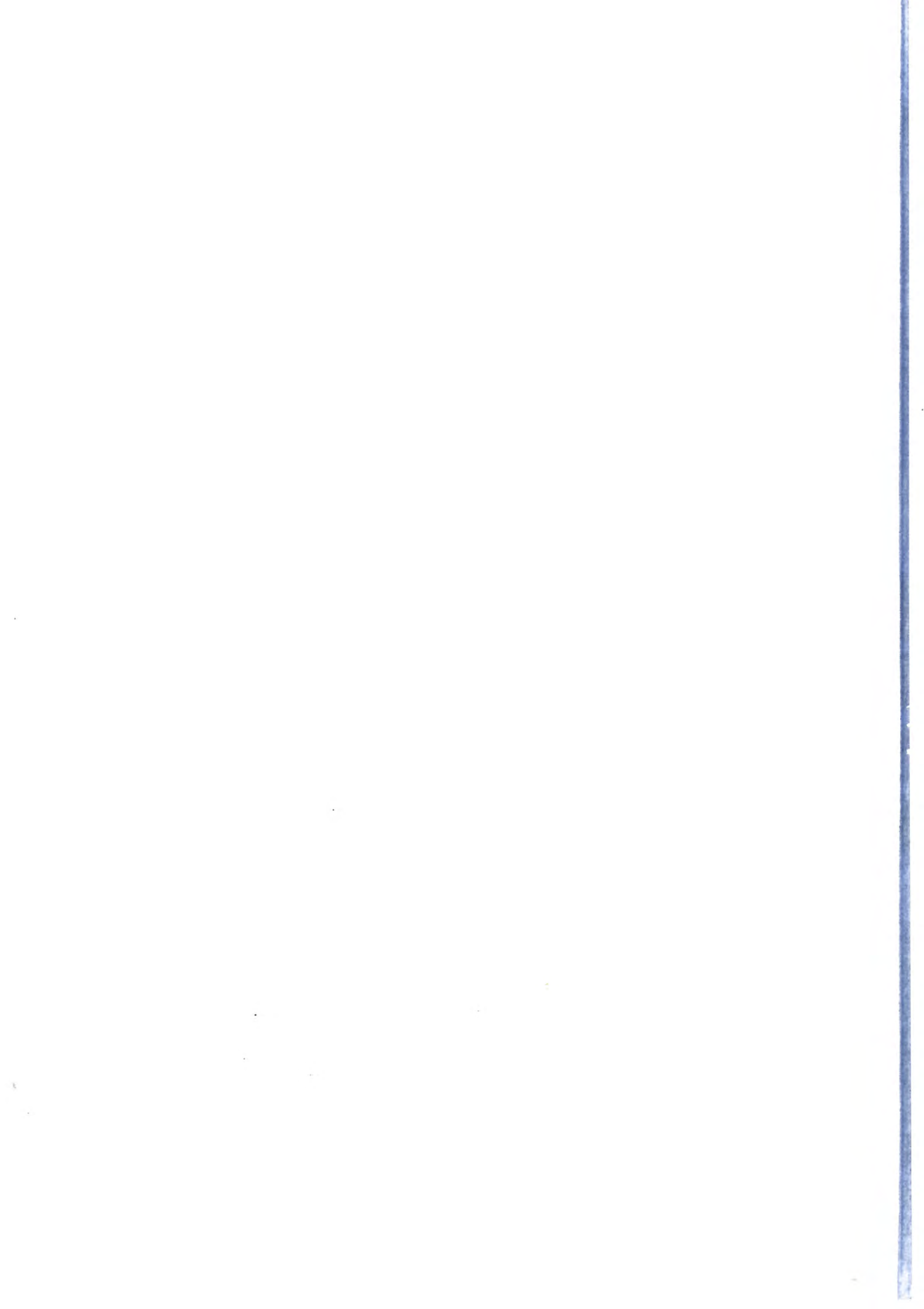
TOSHIN Good Job

シンポジウム「この街で生きて、はたらく」

特定非営利活動法人リベルテ



**Good
Job!
Exhibition
in
UEDA**



福祉のデザインとアートで 障害のある人の「しごと」に ついて考える

事業報告書

平成29年度 長野県 地域発元気づくり支援金活用事業

Good Job! Exhibition in UEDA

TOSHIN Good Job

シンポジウム「この街で生きて、はたらく」

特定非営利活動法人リベルテ



Good
Job!
Exhibition
in
UEDA





もくじ

- 7 Intro
- 8 Good Job! Exhibition in UEDA
- 14 TOSHIN Good Job
- 20 キートーク 障害のある人の「しごと」
- 24 シンポジウム「この街で生きて、はたらく」
- 32 来場者アンケート
- 33 フリーペーパー
- 35 Outro





Good Job! Exhibition in UEDA

グッジョブ!
この街で
「生きて、はたらく」ことを
考える

■エキシビジョン

| 会期

2017年11月21日(火)～12月3日(日)

| 会場

シアター&アーツうえだ

犀の角

上田市中心2丁目11-20

<http://sainotsuno.org>

| 時間

10:00～17:00

■シンポジウム

この街で「生きて、はたらく」ことを考える

会期：2017年11月26日(日)

会場：シアター&アーツうえだ/犀の角

上田市中心2丁目11-20 <http://sainotsuno.org>

時間：14:00～18:00

参加費：1,000円(定員40名)

主催：特定非営利活動法人リヘルテ

共催：Good Job! Project

協力：一般財団法人たんぼの家

MPO 法人エイブル・アート・ジャパン

MPO 法人まる

認定NPO法人クリエイティブサポート・レッツ

助成：環境文化創造局 地元づくり支援基金助成金

Intro

この街で「生きて、はたらく」ことを考える

特定非営利活動法人リベルテは、2015年からは地域の中で展示会やトークイベントを開く事業として「福祉のデザインとアートで障がいのある人の「しごと」を考える事業」を実施してきました。「支援する人」(2015年度)と「居場所」(2016年度)。3年目となる2017年度では「生きて、はたらく」ことをテーマに、福祉・産学官・科学などを横断し新しい働き方を提案している「Good Job! プロジェクト」からGood Job! Exhibitionの一部を巡回展として企画し紹介しました。また、上田市を中心に市民や企業が緩やかに連携し、人が「生きて、はたらく」テーマに通じる上田市を拠点にもつ企業や団体の取り組みも紹介しました。展示に際して行ったシンポジウムでは、3名のゲストのキートークをもとに「わたし」たちが暮らす町や地域で「生きること」と「しごと」について、障害のある人たちの取り組みから「存在の肯定」と「多様性」について議論しました。

社会や地域の中で、生きづらさや社会的な障害との出会いは、モヤモヤと晴れない問い、摩擦が生まれます。「あなた」と「わたし」の関係から、感じる事、考える事、行動し、また仮設的に問いを立てる。そうした試行錯誤が、障害を起点に文化を生み出すのではないのでしょうか?仕事や働き方についても、生きづらさを覆い隠すのが新しい働き方ではなく、もしかしたら「障害」をどうにかこうにかしようと、新しい仕事生まれるのかもしれない。

リベルテは「福祉のデザインとアートで障害のある人の「しごと」を考える事業で、「障害のある人の「しごと」とは?」と地域に向けて問いかけてきました。障害のある人の「しごと」に関連した「支援」「居場所」そして「仕事」と、この3年間でテーマにしてきました。これからも地域の中で考え取り組む機会を通じ、新しい「しごと」や「居場所」を広げていく活動を試行していきたいです。



Good Job! Exhibition in UEDA

アート、デザイン、ビジネス、福祉の分野を超えて、

新たな仕事とはたらき方の仕組みをつくる試みとして、2012年にスタート。

障害のある人の表現を生かした魅力的なプロダクトや

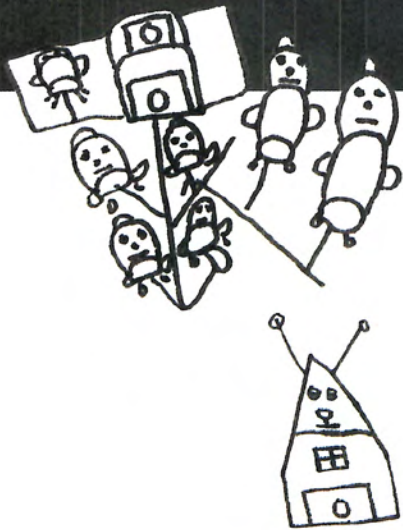
地域の産業との協働から生まれる仕事などをリサーチし紹介するGood Job!展や

すぐれた取り組みを奨励するGood Job! Awardなどを実施。

2016年に、奈良県に誰もが生きがいを持ってはたらくための拠点「Good Job!センター 香芝」をオープン。

Good Job! プロジェクトが、2016年度グッドデザイン・金賞受賞。

今企画ではGood Job! プロジェクトの展示一部を巡回展として企画し展示した。



Good Job! Exhibition in UEDA



はじまりは一本の糸から～
NPO法人ひょうたんカフェ [愛知県名古屋市]



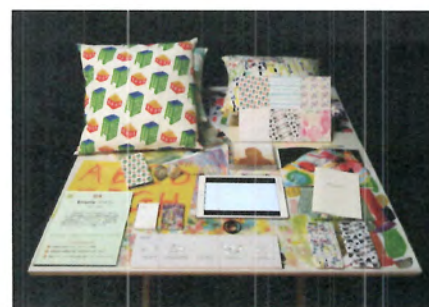
藍染手ぬぐい・型染鯉のぼり
クラフト工房 La Mano [東京都町田市]



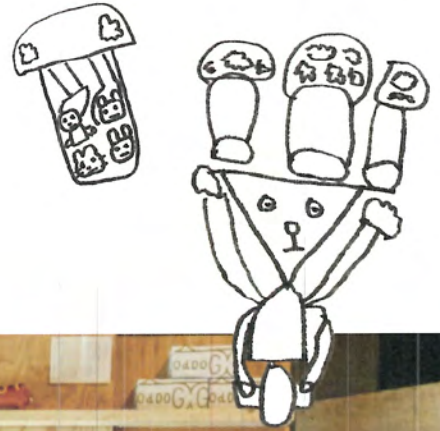
チャリティースイーツボックス
futacolab(フタコラボ) [東京都世田谷区]



ぼんめこの
秋田順子 [愛知県名古屋市]



Entente(アンタント)
ライラ-カセム [東京都目黒区]





A photograph of a workshop or meeting space. In the foreground, several wooden folding tables are arranged, some with papers and documents on them. A woman in a red sweater is seated at a table, looking at a yellow folder. Another woman in a white sweater and dark skirt stands at a table in the background, looking towards the camera. The room has large windows with dark frames, and the lighting is warm, with several pendant lights hanging from the ceiling. The overall atmosphere is busy and collaborative.

TOSHIN Good Job

上田市を中心に市民や企業が緩やかに連携し、

今回の企画に通じる人が「生きて、はたらく」取り組みを行っている団体や企業を紹介した。

市民と「しごと」とは、何かということをも地域の中の取り組みを紹介することで、ともに考える機会を設けた。



Good Job! Exhibition in UEDA

2017年11月21日(火)～12月3日(日) 10:00～17:00

シアター&アーツうえだ 犀の角

上田市中央2丁目11-20

[公式サイト] <http://sainotsuno.org>





犀の角

「犀の角(さいのつの)」は、上田市の中心地・海野町商店街の一角にあり、<劇場>と<ゲストハウス>からなる民間の複合文化施設です。地域住民、アーティスト、旅行者が、演劇や音楽、アート作品やイベントなどを楽しみながら相互交流することにより、この場から新しい価値観が創られていくことを願い活動しています。



認定NPO法人侍学園 スクオーラ・今人

侍学園(通称:サムガク)とは、社会において自立した生活をおくることに困難を有する子ども、若者たちが、自分らしく充実した人生が送れるように後押しする民間の教育施設です。誰かに与えられる教育ではなく、自ら探し、求め、スタッフと共に成長できる「共育」を活動理念としています。





NPO法人 上田市民エネルギー

屋根や土地をみんなでシェアする市民発電所「相乗りくん」で自然エネルギーを増やしています。これまでに38ヵ所に441.37kWの太陽光パネルを設置、上田を始め全国のみなさんからの出資はもうすぐ1億円に達します。「わたしたちの未来はわたしたちが創る」、アクションを伴った市民力や地域力が未来づくりのカギだと考えています。



株式会社バリューブックス

インターネットを介した古本の買取販売事業を軸に、「日本および世界中の人々が本を自由に読み、学び、楽しむ環境を整える」ため、本の無償提供活動「Book Gift Project」や寄付プログラム「charibon」、実店舗のBooks & Cafe「NABO」や私設図書館「Library lab」、古本の移動販売車「BOOK BUS」の運営などを行っています。



HanaLab. UNNO

HanaLab.UNNOでは、地方でも、子育て中でも、仕事ができる環境を提供し、女性の働き方の多様性を地域に生み出しています。主な仕事内容は、「子育て情報サイト」の記事制作です。20代後半～50代の女性が中心となり、自身の子育て経験のほか、保育士や教員など様々な経験を活かしながら働いています。



NPO法人リベルテ

個性や自己決定、そして日々の「何気ない自由」について、リベルテは障害のある人たちとともに取り組むことを目指し2013年に設立。「何気ない自由」や「権利」を尊重していきける社会や人、関係づくりを行っている。街の居場所や表現の場として障害福祉と文化活動を地域の中で試行している。





こまち
はたらく



PLUG & PLAY



キートーク

障害のある人の「しごと」

障害のある人の仕事、アート活動や積極的にデザインを取り入れた取り組み、

または福祉で働く支援者の背景や福祉が担ってきた「居場所」について講師からの実践を紹介していただきました。



社会福祉法人わたぼうしの会
Good Job!センター香芝 企画製造ディレクター

藤井克英

社会福祉法人わたぼうし福祉会Good Job!センター香芝の取り組みと、今巡回展のメイン事業であるGood Job! プロジェクトの報告を行った。アートやデザインを、障害のある人の働き方の選択肢を広げるために有効な手段と考え、企業やNPO、大学など文化の垣根を超えて課題や知恵を共有し、共に新しい働き方作りに取り組んでいる。また、全国の事例を紹介し、働き方を問い、考えるGood Job! プロジェクトを2012年から開催している。

Good Job!センター香芝のものづくりの現場では、「苦手なことをどう解決するか」ではなく「得意なことにいかに集中できる環境を作るか」、またアートやデザインを取り扱うが、創作活動が得意な人も、単純作業が得意な人もいる中で「その人に合った活動を見つけること」を大切にしている。ものづくりの独創性と、最新技術の均一な品質と量産性が結びつくことでより可能性が広がると感じ、積極的に取り入れている。

表現の場が広がり継続していくために、Good Job!センター香芝やGood Job! プロジェクトの前進として、中間支援が必要と考えエイブルアート・カンパニーが生まれた。障害のある人の作品を素材として使いたい企業と作者を繋ぎ、地元で盛んな繊維産業のメーカーとコラボして生まれたアートソックスなど、福祉事業としてだけでなく、地域の産業の活性化にも取り組む。作品やイラストの提供に留まらず、商品が売れることで表現の場に寄付される仕組みなど、企業の社会貢献から、共に新しい価値や仕組み作りを目指している。

今後も、Good Job!センター香芝では、「できる・やりたい」の中で、「障害のある人の尊厳ある仕事」を目指していく。



社会福祉法人わたぼうしの会
Good Job!センター香芝 企画製造ディレクター
藤井克英

たんぼの家プログラムサポーターとしての活動を経て、2002年よりスタッフとなる。大学で工業デザインを専攻したことをいかし、人となりのあるものづくりをテーマに仕事に取り組んでいる。現在は、商品や企画の開発のほか、デジタル技術と手仕事を組み合わせた障害のある人のはたらき方について実践研究を行っている。

[公式サイト] <http://goodjobcenter.com/>



NPO法人まる代表理事
株式会社ふくしごと 代表取締役副社長

樋口龍二

「工房まる」から「maru lab.」そして「ふくしごと」の取り組みから、障害のある個人の仕事について幅広い樋口さん自身が取り組んできた実践や事業の報告があった。障がいのある人と出会って、周囲との関係性が構築できていないことや、挑戦する機会がないことなど、社会と彼らの間に障がいがあると感じた。その人らしい生き方を選べる選択肢を増やすことを目指している。

なぜアート活動かという、「その人らしさが表現」でき、「表現が認められることはその人の存在も認められる」と思っているから。

工房まるには身体障がいが最重度の人がたくさんいる。そういう人たちの仕事や表現とは何なのかを考え続けてきたという樋口さん。その中の取り組みとして、「アキボタン」という活動を紹介してくれた。彼らしさが現われる行為を通してボランティアとボタンを制作する。彼に必要なのは関係作りだと気づき「人と出会う場としてデザイン」した。「孤立するかもしれない」ということは障害のある人にとっても大きな課題であり、表現を通してその課題を越えていくということを工房まるでは大切にしている。

障害のある人たちの表現作品を元に、違いを認める感じることでできるような展覧会、

Lifemapを2008年より10年間続けた。その中で、作った本人と出会う場が少なく、表現をダイレクトに見てもらえる場を作りたいと、彼らの対話から生まれた言葉で脚本を作る、パフォーマンス・アーツという形で表現した。

また、樋口さんは福祉関係者ではない人たちと組み、ふくしごとを立ち上げた。「してあげる」支援のかたちではなく、「施設の強み」、「障がいのある人たちの強み」を出すことで、「君たちとそういうことをやりたい」と言われる仕事を、企業や地域との共通価値の中で創造を目指している。

NPO法人まる代表理事
株式会社ふくしごと 取締役副社長
樋口龍二

1998年、染色会社在职中に「工房まる」と出会い、障害のある人たち感性に魅了され即転職。2007年に「NPO法人まる」設立と同時に代表理事就任。2015年2月には、障害者の自立のサポートを目的とした「(株)ふくしごと」を地元福岡の企業やクリエイターたちと共同設立。2014年、「NPO法人まる」が「第22回福岡県文化賞(社会部門)」を受賞。

【公式サイト】 <http://maruworks.org>

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

理事長

久保田 翠

久保田さんのセッションでは、重度の知的障害をもって生まれた息子タケシくんの子育てのため退職した際「自分と息子が社会から周縁化」されていくことを感じ、自分たちが安心して入れる場所を作ろうと始めたクリエイティブサポートレッツについての話からスタートした。「わたし」と「あなた」の関係性の中に障害があって、そこにこそ多様性を築いていくチャンスがあり、色んな人達が一緒にいる場を作ることがミッションと話す。

タケシくんが生まれた時に、まったく理解できない人が生まれたという感覚になり、彼の存在を認めるためには、自身が学んできたアートだと考えた。彼が夢中になっている行為が学校では問題行動とされた時、彼の人格も何もかもないと感じ、タケシくんの「やりたいことをやりきる熱意」を文化創造の軸として「たけし文化センター」を作った。コップに指を突っ込んでしまうタケシくんがいても、共存できるカフェ空間を作るなどしてきた中で、ダメと制止せず、子供も大人も、色んな人が一緒に入れる空間が作れることがわかった。

レッツでは、ぬいぐるみなどをガムテープでぐるぐる巻きにする人、10メートルを20分かけて歩く人、台車にラジカセやテレビを載せ街の中を散歩する人、その人が生活や生き方に根ざして馬鹿みたいに一生懸命やっている、熱心に取り組んでいることを「表現未満、」と呼ぶ。個人の生活文化に根ざしている行為をもう一度見直し、「あなたを表す大切なものですよね」と認めていくのだと久保田さん。アルス・ノヴァ、のヴァ公民館では、メニューを決めない、作業しない。それが問題行動とされてしまう表現未満を豊かさとして見直すことを可能にしている。

仕事ってどうということだろうと考えた時、障害を持つ人達が存在することを仕事にする。何もできないと言われた人の中に豊かなものを感じとり、それがその人の仕事になる。観光ツアーを組み、アルス・ノヴァに来た人が一日メンバーと過ごし、ゲストハウスに泊まっていろんなことを喋る試みも始めた。今後も表現とはなんだろう?を問い続けていく。



認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

理事長

久保田 翠

東京芸術大学大学院修了後、ランドスケープデザインの仕事に従事。1994年に長男の出生、子育てをきっかけに、2000年にクリエイティブサポートレッツ設立。2004年NPO法人化。2014年認定NPO法人化。2008年たけし文化センター事業スタート。2010年障害福祉施設アルス・ノヴァ開設。2014年たけし文化センター・ノヴァ公民館開設。2016年から「表現未満、」プロジェクトをスタート。

【公式サイト】 <http://cslets.net>



シンポジウム

「この街で生きて、はたらく」

シンポジウムの最後のセッションでは障害のある人の仕事について、
アート活動や積極的にデザインを取り入れた取り組みなどを手がかりに、
または福祉で働く支援者の背景なども踏まえ、福祉が担ってきた「居場所」についても掘り下げました。
「しごと」について遠回りして考えながら、仕事そのものを考える機会となりました。



シンポジウム

「この街で生きて、はたらく」

シンポジウムの最後のセッションでは障害のある人の仕事について、
アート活動や積極的にデザインを取り入れた取り組みなどを手がかりに、
または福祉で働く支援者の背景なども踏まえ、福祉が担ってきた「居場所」についても掘り下げました。
「しごと」について遠回りして考えながら、仕事そのものを考える機会となりました。



武捨 今回、Good Job! Exhibition in UEDAという企画展の巡回を行うにあたり、「はたらく」ということを今回テーマにしました。キートークをお聞きして、表現活動や本人のできること、得意なことを仕事にして、人とのコミュニケーションも仕事の循環と捉えて個人能力や資質に依存するのではなくコミュニケーションも含め「仕事」拡張していく「ボタン」のお話や、表現未満というこれは表現なのかどうかという問い掛けから、社会だったり、地域っていうものにアプローチしていくという、多岐多様な深さのある話を3者の方にさせていただきました。

このセッションのはじめに各団体について、あらためて働くとか仕事というものも合わせて3者にお聞きしようかなと思っています。

樋口 働くのはお金稼ぎとかそういうことじゃなくて、ごめんね。先に言っちゃうけど、存在が評価されることだと思う。評価というか、認められること。ただ、さっきのボタンの話もお金じゃなくて、彼のこれからのことに対して何か自分で発信できるようにしていくとか、そういう循環をつくっていくことだと思う。

今、僕ら施設運営やってて、行政から就労、就労と言われるじゃないで



すか、よく。就労って何。3万円とかいうこと。果たして、じゃあ、全員が3万円もらって幸せになるのかなと思ったりもするし。けど、3万円ほしくて一人暮らししたいと思ってる人もいるし、3万以上ほしがって。

ただ、いろんな自分の欲求とか、そういったものがクリアされていくことができるようにしていく行為だと思うし、それができないから存在を認めていて、彼がいなくてそういうことができないみたいなことを、ちゃんと彼の役割をつくっていくことなのかなと思っています。

久保田 働かってイコールお金を稼ぐことだと思えないんですよ。だって、主婦って一生懸命働いてるけどお金につながるわけじゃないじゃないですか。だから、何でもかんでもお金に変えて考えるっていうところにすぐ寂しさというか、貧弱な感じが、ものしか生まれてこないというふうに思います。

たけしが石入れてずっと遊んでるっていう姿を何の役にも立たないっていうふうにも思うこともできるけれども、こんなに熱心に一生懸命やっているというふうに見たときに、全然違う人格が立ち上がってくるわけですよ。それが人を認めるっていうことだし。

それと、私たちのところはスタッフも20人ぐらいいるんですけど、みんな見るとお金を求めてもちろん来てる部分もあるけれども、お金だけではないんですね。まず人って自分の安心した居場所ができて初めて、社会とか人とコンタクトを取ろうというふうにも思うんだと思うんです。

一番人間が怖いのは孤立することだと思うんですね。私も身をもって感じましたが。だから、孤立しないっていうことから、まず自分が安心してられるコミュニティーなり、それが意外に日本人は仕事場だったりしてるだけで。

実は、お金稼ぐことが目的って言われるけどそうかなって。特に日本の男性なんかは、働くことを生きがいにしてますよね。お金はある意味言い訳じゃないかと思うんですね。だから、もうちょっとお金につながらない働いていう意味をしっかりと捉えないと見誤ると思う。

文化っていうものは私はとても大切だと思うし、それがアートなのかもしれないけど、その文化を育てていくというか、豊かなものに、人が豊かに生きるために文化はあると思うから、その文化を耕して豊かなものにしていくときに、お金が必ずしもつながらないという。

まずは自分たちの生きがいとか居場所とか、そういったものをつくり始めるほうが必要なんじゃないかなと思いました。

藤井 今の久保田さんの話に続いてなんですけど、僕もどういうふうに通ってきたかと思ったときに、遊ぶように働いてきたというか、遊ぶって聞くと怠けるとか、やらないとかということじゃなくて、自分から興味を持って進んでやれるかどうかみたいなことなのかなと思っています。

子どもも、自分で自分のルールで遊び方をつくるみたいに、自分で自分の仕事がつくれたらどんなに楽しいかと思ったときに、障害のある人だけに限らず、自分が充実感を持てたりとか、どれだけ満足して仕事ができたくみたいなことであればよいのかなと思ったりしているんですね。

それが創作活動でもいいし、シール貼りでもいいし、カフェで接客をすることでもあっていいというか。それが自分が本当にやりたいと思っていたり、それがまた人から見られて、その人にとってよかったというか、お互いにとって満足できるようなことが仕事にあるということは、社会につながることもあったりするんで、それは小さな一歩の積み重ねでしかないのかなと思ったりして。

武捨 自分でも地域とか、今回トークのタイトルに「この街で」って付けた理由としては、自分が社会とか地域とか、まちづくりもそうなんですけど、「それは何なのか」って、なかなか自分で実感を捉えられなくて、個人的にはもしかしたら社会科が苦手だったからなのかなと思ったりもするんですけど。たぶん、そういうことじゃなくて。最近思ってるのは、私とあなたという関係の中でしか関わりが、仕事とかもそうですし、表現だったりもそうですし、そういったものを見つけれないじゃないか、と思っているところがあるんです。

そういう意味で今回、実際社会や地域というものに対して、福祉やアートという意味の深さも幅もある活動をしている自分たちが、どのようなスタンスを持たなきゃいけないのかなとか、社会に対してどういふうに自分たち意思表明だったりとか、やり方を表明しなきゃいけないのかなという、リベルテという法人としても考えないといけないと考えりようになりました。



久保田 キートークでは話しできなかったんですけど、実は最後のスライドがあって、今度浜松市の中心市街地に施設をつくるんですね。上田市とは全然違って浜松って80万都市なんです。ヤマハとかスズキとかっていう大きな工場もあつたりする街なんですけど。

さっき家賃を聞いたんだけど、結構家賃高い街なんですね。坪あたりだいたい5,000円から1万円でそこから下がらないような。だから、そこそこ1階は埋まってしまうみたいなのところなんですけど。

私、重度の障害者の生活介護を街中につくろうと思っていて、日本財団さんに応援していただけることになったんです。日本財団さんってすごい英断だなと思ったのは、何を評価されたかということ、重度の障害者が何もしないでただそこにいて、要するに街にいただけで、彼らの「シゴト」だと位置づけるということ。

中心市街地というか、街の中に重度の障害者がいて、アルス・ノヴァと一緒に何もしないんですよ。ひたすら遊びに行くんです、街に。施設の中

にいても何にも起こらないんで、どんどん遊びに行つて、街の人たちに出会うことだと思ってるんです。出会うって言葉ではいいんですけど、つまり問題を起こすってことなんですよ。

例えば、喫茶店に行つて紅茶をこぼすとか、道で踊るとか。そういうことを平気でする人たちだから、それをじゃんじゃん街でやるんです。そうすると、街の人たちがどういふ反応を示すかは分からないけれども、重度の障害者の人ってこんな感じみたいなのが、そこで初めて実態が分かるんだと思ってるんですね。

この街は分からないんだけど、浜松は拠点校といって、重度の障害者は特別支援学校に全部入れられちゃってるんですよ。その特別支援学校自体が遠隔地にあるんですね。海のほうとか山のほうとか。

だから、一生のうちに重度の障害の人と会ったことも、見たことも聞いたこともないという人がどんどん生まれてるんですよ。それでインクルーシブ教育だのって言われても何も始まらないですよ。

それだったら、大人になってからだけどにかく出会おうと思って観光をやったりしてるんですけど、こういう場所をつくっちゃおうと。

日本財団さんがなんで応援してくれたかということ、そんなことを考えてる人の前例があんまりないという。重度の障害者の働き方って一番開発されてないんですよ。だから、その人たちの働き方として、街にただだいて問題を起こすみたいなのは言わなかったけど、そういうことを仕事だと言ひ張るレッツに、じゃあ、ちょっとお金を出してみようかみたいになつたんだと思うんですね。

もう一つ、この間もブレークスルーで、NHKの「ハートネットTV」ですごい食い付かれちゃったんですけど、重度の知的障害の人のシェアハウスと、一般の人のゲストハウスを併設させようと思ってるんです、3階に。

これも同じように、要するに、一生のうちに1日ぐらい重度の障害者と生活を共にしてもいいじゃないかと思うんです。それをやりたい。障害の人をとにかく知ってもらおうということが大切だと思つていて。

スタッフができることは、福祉の関係者じゃなくて一般の人とどれだけつなげられるかということだと思つているので。

もう一つすみません。長くなっちゃうんですけど、切実なのは、私子どもが21なんですけど、もう一緒に生活できないと思つてるんですね。今日も朝、ヘルパーさんに来てもらつて、送り出しはやっていただくんですけど、私と一緒にだると暴れたりいろいろするんです。だけど、ヘルパーさんどうまくいくんですよ。スタッフはどうまくいくんです。だから、家族って関係が変更できない。

いつも思つるんですけど、障害者の人権ってよく言われるんですけど、じゃあ、家族の人権。私の母親としての人権は一体どこにあるんだろうなって感じる時があるんです。

福祉って、家族を中心に成り立ってるものなんです。だから、家族が倒れて初めて入所施設に入れるようになって、うち、実は主人が今度入院しちゃったんですね。だけど、それでも施設に入れないんです。

そういう事実を常に突き付けられたときに、街で生活する、地域で生活するってものすごい薄っぺらい言葉にしか聞こえてこない。ああいう重度の障害の人たちが親と離れて街で生きていくってことがどういうことかという、福祉の制度で何かが全部整うなんてあり得ないですよ。国に

そんなにお金があるわけじゃないから。

そのときに何が必要かという、知り合いを増やしておく。さっきおっしゃったけど、一生のうち1日でもいいから見てくれる人をいっぱい増やすというようなことだと思うんです。それって、こちらからのすごい熱意でしかないんだけど、反対に、レッツで観光をやってみようと思うのは、障害の人たちと一緒にいることによって、何かいろんなことに気が付いていく人っていっぱいいるんですよ。

今日は会えてよかったよって帰っていく人ってたくさんいるんですよ。だから、実は皆さんは彼らに会いたがっているということも言えていて、それを仕事にすればいいんだと思うんです。私は思うの。



武捨 その辺の話は、先ほどに樋口さんがキートークをでもお話されていた「ボタン」の話にも通じるところかなと思っていました。本人の仕事にもなるし、スタッフ側の働き掛けが本人に「働き」になっており、本人の向こう側、つまり社会や地域の方にも働き掛けしていると思うんです。それが1つの仕事になっている気がしていて、そこに注意して見ている人が支援者だったりする。そういうところで意識することか、技術としてこうしたほうがいいのかとか、スタッフとシェアしていることって、あったりするんですか。

樋口 本気で関わることじゃないですか。その人の将来で不安となるものを何かつなげるってことを考えて、だから、方やお金の人もありますよ。月5万円稼げるようにして、結婚して一人暮らししたいという願望を持っている人たちも実現してるし。

だから、当事者の気持ちをつかむこととかじゃなくて、本気になればいいんじゃないですかね。何て言うのかな。難しいけど。この人のここが不安って思わないですか、親じゃなくても。

今施設にいて豊かな時間が行われてるかもしれないけど、例えば、このあと10年後とか考えると。それは親が何とかしなきゃいけないって話じゃなくて、ここにいる施設を利用していい方向に向かうように考えたいと思うし、スタッフとかにもそれが仕事だよねって話をしている感じ。

今の話で、この建物。ここに大牟田市ってあって、地方の高齢者がみんな街に住むように、病院側からやって、地方の高齢者がいっぱい徘徊(はいかい)する街になっちゃったんですよ。それで、何が生まれたかという、一人一人の徘徊ルートをお店の人が把握して、ちょっと違ったらこっちょとってサポートが自然と、制度とかじゃなくてできちゃって、みんなが支え合ってるっていうふうな、すごい面白い事例があって。

これは、さっき、ふくしごとで関わってるまちづくりのやつが仕掛けたんですけど、地デザって言って、地域デザイン。自分たちで地域をつくらうみたいなワークショップをやってみて、そういうことが生まれたかということ。それが当たり前かなと思うんですよ。そこにそういう人がいるんであ

れば地域というか、その人たちと関われる場をつくっていくのはその人たちで考えるというか。

僕、教育ってずっと思ってたんです、最初。法令を変えとか。福祉の前に教育だと思って、それこそ遠いところに特別支援学校があるみたいなのも、そういうところを変えなきゃって思ってたんだけど、例えば障害のある子が生まれたら、地域が知って、その人が大人になるにはどうしたらいいかみたいなことを想像できる機会があれば、それっていっぱい可能性があるんだと思う。そういう交わりをつくるのが一番なんだろうなとは思ってますね。そういう関わり方とか。

武捨 上田市にかぎらず自分たちから「新しい働き方」とか、地域の中で社会に働き掛けられるような環境づくりをしたいという人たちもいると思うんです。けれど、そういうときに「どうしたらいいんだろう」って悩める方も沢山いるように思っています。例えば何かアイデアとか事例だったりとかっていいのはありますか。

自分で場づくりを始めたいと思っている人とか、これから新しい仕事を、例えば障害を持っていても新しいことを自分から発信していきたいという人もいかなと思うんですけど。そういう方が、本人の側からどう発信したらいいのかみたいなところって、何かありますか。



久保田 のヴァ公民館をやってる前に、たけし文化センターというのをちょっと実験なんかもやったんですけど、何かをやりたい人たちがまず必要とするのは相談できる人とか、あとはそういうことを何とかしゃべれる人たちです。

1人でやろうと思っても仲間がほしくなるんですよ。それと、困ったときに愚痴が言える人がいるとか。そういう意味で、場って大切だなと思って。たけし文化センターって割とそういう人たちがわーっと来てて、何かやりたい人のことを全力で応援するみたいなこともやったもんですから、それはよかったなと思ってるんですけど。

でも、反対に場を運営するって大変なことなんです。何のお金にもならない場ですから。ただ相談に来るだけだから。人もいるし、場所もいるし、光熱費はかかるし。だから、なかなか経営できなくなっちゃうんだけど。

私ね、それを福祉施設がやるべきだなっていつも思うんです。福祉施設って場所もあるし人もいるんですよ。だから、自分たちが、障害じゃなくて高齢者もそうですけど、そこに人たちのためのサービスをやるっていうふうにするから閉じちゃうんだけど、そういう場所を必要とする人はいっぱいいるわけだし。

あと、障害者も高齢者も子どもも、みんないろんな人に会いたいんですよ、本当は。施設の職員とだけ会いたいなんて思ってる人は1人もいないわけで。それは施設の職員の人たちが勝手に思ってるだけだから、

だからどんどん開いちゃって、そうすると訳の分からないことも起こるんですけど、それらも含めて私たちの仕事だ。むしろ福祉の人たちの仕事だよねって思えると、本当に変わっていくと思う。日本が変わっていくと思うんです。

武捨 僕なんかも前の職場では迷ったときは電話したりとか、実際に出張で行ったり、出張じゃなくても休みをつかって行ったりしてました。例えば、たんぼの家にもよく行きました。リハビリを立ち上げる前に働いていた職場では、チームや現場の責任者の人に直談判して、1週間ぐらい泊まり込みで研修に行かせてもらったこともあります。寝泊まりして、毎日悩み事だけを垂れ流していくという恥ずかしい爪痕だけ残してきたことがあります。

例えば、働くという話から少しズレてしまうかもしれませんが「たんぼの家」ではそういう受け入れのとき、そういう悩み多き人に、どう問いを返していくとかシェアしたりすることはあるんですか。たぶん、たくさん見学者含め色んな人が訪れると思うんですが。



藤井 団体とか、何て言うか、よりは、個人対個人みたいな気はしています。よく言われるのも、例えば福祉施設ができるときに、個人としてはすごく応援したいけども地域としてはNGみたいな感じで、個人個人をどう思ういでどくかみたいなこととかが肝心なのかなと思うことはよくあります。

今日も、僕もこういうトークってそんなに得意なほうじゃなくて、1対1だとすごくしゃべりやすいのが、大勢いるとなかなか言いたいことがきちっと言えなかったりするので一緒にのかなという気はしているところがあるので。

個人が何か思いを持ってやりたいというときに、その個人の思いに賛同してくれる個人がどれだけいるかというネットワークを地道につくるみたいなところだったりもするのかなとは。

久保田 ちょっとだけしか来てないから分かんないんですけど、ここの犀の角さんとか、コワーキングスペースがこの通り沿いにありますよね。この2つがあるということがこの街のすごさだなと思って。

そんなにお金生まれないと思うんですよ、こういう場所。運営する人たちの思いがすごくあると思う。だけど、きっとお金ではなくていろんな人たちが集まってくることで、そしてそこで何かが生まれていくかもしれないこと。そこに楽しみを持ちながら頑張れる人たちが街にいるというのは、すごいことなんですよ。

それは実は、アート関係の人たちにはそういう思いを持って人たちがすごくたくさんいる。その人たちと福祉施設の人たちがつながると、福祉施設のほうは場所を持ってますし人もいるじゃないですか。それをどんどん

開いていけたらいいと思います。

武捨 その開き方とか、今は犀の角の荒井さんとも話すことなんですけど、文化事業というか、文化活動や芸術で「働く」ってお金にならないけど、分かりやすい表現だとお金になってお客さんが入って収益になるみたいなことがあるとぼくは思っています。

けれど、やりたいことって必ずしもお金につながらないことがあるなと思って。特に小さい規模でやると。それでどうやって食っていくのかっていうのがあったりとか。

福祉で事業を行っていくというイメージはつきやすい反面、文化の事業で仕事に行くと難しさもあり、芸術家や表現者にとって切実な問題だと思っています。それはどんな方法があるのかなということは悩むことがあります。人とのつながりをつくりつつ、どうやってそこでお金を生み出していくかというところでいいアイデアとかありますか。

樋口 今日話したライフマップとかは福岡市のお金を10年間使ってもらってるんですけど、行政が10年同じ団体にそういうのをやるって異例で、結局行政側が10年たって、行政側がNG出したんですよ。ほかの行政の部署から突っ込まれると、これ以上やると。

それは3年目から言われてたんです、4年目に入るときから。異例です。けど、こちらとしてはそんなことは知ったことじゃなくて、本質的な課題を解決するために、そっちが本気なのかどうかですみたくないことを言ったんですよ。

例えば、そういうことにお金を使ってほしい。それで僕らはもうけたいわけじゃなくて、そういうアクションを起こす環境を構築したいからそういう企画をしたり、また続けていきたいというって。

文化事業ってお酒をつくることと一緒になんです。寝かして発酵して。種まいてすぐ咲くみたいなもんじゃなくて、寝かして、寝かして、発酵しておいしい時期をちゃんと時間かけてやることなので、文化が何年事業で成果を出せて言ってるのが信じられなくて。文化振興っていうのは時間をかけてやらなきゃいけないし、まずはいろんなことを知ってからやらなきゃいけないし、やり続ける中で、ちょっとずれたりすることを修正するとかっていうことも必要だし。

そういうのをいかにちゃんと伝えるかというところが必要なことだったりするんですよ。そういうところで継続して、投資をしてくれるっていうことも可能っちゃ可能で。

NPOって、こういうことをしていきたいっていうことって明確に持っているんで、そういうところをちゃんと伝えていくというのは必要なことなんですけどね。

久保田 福祉は全然食べれますよ、アートに比べれば。アートはもっと大変ですよ。

どっちがいいとか悪いではなくて、福祉は甘えるなみたいに、ちゃんと全然生きていけるし、今は制度でね。アートだけではなくて、お金にならないことを一生懸命やってる人なんていっぱいいますからね。

本当に福祉が障害のある人たちの幸せを考えてるのであれば、彼らを守ってるだけでは駄目だと思う。彼らをどれだけ外に出して、それこそ私



みたい、21歳になってこれじゃまずかったんだって気が付く母親を産んでいっちゃ駄目なんですよ。

もっというんなサービスがあって、当たり前のように地域に彼らはいて、それこそ、LGBTの人とか、男性同士がカップルになって一軒家に住んでるとか、そういうことが起こらない限り幸せなんてやってこないっていうふうに思いますね。それには、福祉施設がやれることはまだいっぱいあるんじゃないかなと思います。

藤井 僕ももう15年以上働いてくると、福祉の現場でぬるいお湯に漬かってるなっていうのを感じるときもあるんですね。最近、久保田さんも、障害のある人ももっと外に出るっていうときに、自分がじゃあ、そういうことができてくっていったら、ぬるま湯の中でお給料をもらってるみたいなのところもあるので、メンバーの方が地域に出て働いていうときに、それを支援してるスタッフ自体がもっとシビアな環境に身を置く必要もあるのかなっていうふうに感じるようになってきましたね。

お金や売り上げが必要っていうふうに考えたことはそんなないんですけど、よく思うのは、小さなところとか、遠いところとか、弱いところを組み合わせることで課題のヒントがないかよく考えたりすると思いがけない、福祉で一番遠いところって何だろみたいなことを考えたときに、意外とまったく違うからこそ興味があるとか、利害関係がないからこそお互い固まって話せたりとか、意外なチャンスがあるみたいな、そういうことはよくあるなと思って。

仲がいいとか、同じ福祉の分野だからこそ話せること以外に、何か意見を戦わせたりとかすることによって、新たな可能性が生まれたりするっていうのはよくあるなって思ったりします。

武捨 最近自分が管理者としてチームをつくった中で、働きやすさというのが1つあるんですけど、もう一つ、社会を変えるとか、リベルテでこれからやっていきたいなと思ってることの理想像みたいなのは確かにあって、それをスタッフに求めなければいけない状況が出てきたときに、そこがどうしてもかち合うときが絶対出てくるなと思っていて。

こうなったらいいなという社会とか地域とゾーンがぼんやりあったときに、そこに行けば行くほど、先頭に立つ人がしんどくなる状況ってあるなと思ってて。ヤマアラシのジレンマみたいな。近づこうとすればする人ほど大変な状況になってくるんじゃないかなと、実は思ってた。

そのときの仕事観とか、どう自分たちを捉えたらいいとか、どうチームワークをつくっていったらいいのかなというのは、今ちょっと悩んでいる

時期で、そこら辺で、チームだったりとか、障害のある人と一緒に何かやるってときに、どういふうにそんなものをつくってあげばいいのかというのが何かあれば、アイデアをいただければなと思ったんですが。

樋口 武捨くんの相談みたいになってきた。

武捨 ぼくの大相談会みたい(笑)だけど、同じようにそういうことを、思っている支援者や施設の管理者もいるし、個人で関わっている人もいます。自分が経営者というか管理者の立場になって、個人の思いも大切にしたいなと思うんですけど、みなさんの立場でどうバランスを取ってるのか気になります。実践の結果が出るまでには、「糧」となる過程がたぶんあると思うし、そこではスタッフ同士のやりとりだったりとか、チームでやりとりが出てくると思うので。どんなふうにされてるのかなというの、聞けたらなと思っています。

久保田 徹底的に話し合っしかないと思うんですね。あと、福祉の人たちというか、障害の人たちと毎日一緒にいる人たちは、絶対彼らのことがすごい好きになるんですよ。みんな。だから、彼らの幸せって何だろうなっていうことを突き詰めていくと、動く動機になるなっていうのを思います。

障害の人を幸せにしたいがために自分が犠牲になるというのはあり得ないと思うんです。それって人権の侵害に近い。私が実は、障害のある息子と一緒に生活してきて気が付いたことなんですけど、自分の幸せとその人の幸せっていうのは両立していかないと、本当のいい関係って生まれなないんだと思うんです。親子が駄目なのはそこなんですよ。犠牲になっちゃう。犠牲になることが前提条件になるんですよ、子どもだからとか、私が産んだんだからとかね。それは駄目なんです。崩壊してただけです。スタッフは、自分も幸せになる。自分もこれやってると楽しい。彼にもいいっていうものが絶対にあるはず。そこは探っていくしかないし、誰もやってないことかもしれないので、とにかく考えて考えて考えていくしかないんですよ。

武捨 自分の弟が統合失調症なんですけど、一緒に暮らしているときは相容れられない。やっていることや仕事にしてもぼくが「何言ってるんだろう?」「何やってるんだろう?」と、どうしても心配に思ってしまう。で、そうこうするうちに、「だったら、ぼくが実家から出て一人暮らしをしよう」「ぼくが変わろう」と思う。で、実際に家族にも相談せずにぼくが一人暮らししたら、なぜか弟も落ち着いたりする。そういうのを見て、自分が勝手に考えてる関わり方とか、こうなればいいなというのを押し付けていたんだなみたい

なことを考えたことがありました。そこから自分の仕事観や福祉について、かなり考え方もやり方も変わったことがあって、そういうのも、うまく形にできればいいなと思っはいるんです。

続けて自分家族の話になってしまいますが、弟は、隠してるわけじゃないんですけど、周りが「お前は障害者だ」言うのって変ですよ。で、認定の手帳をもらうまでだいぶ時間がかかっていました。つい最近、やっと手帳をもらうことを自分で決めた。つまり障害者になるにも手続きが必要なんですよ。で、そしたら途端に自分のことを人前でオープンに話したりする訳です。家族もそういう本人の意思ならオーケーだと。この前は、弟が病院のケースワーカーさんにある高校生の授業で「当事者である自分」のことをしゃべる機会に連れて行ってもらう機会がありました。それで弟は本当に行く決めて、1時間のコーナーをもらったんです。その原稿の相談を僕にしてくれたんですけど、僕にそんな兄弟の相談なんて10年とか20年ぐらいなかった。なかったのに、あらためて僕に相談してくれるんだと思って、アドバイスする。結果は、原稿用紙を後で本人から見せてもらったら、全部で3頁ぐらいの原稿の自分の障害のことが最初の1頁の内、半分ぐらい。後は、なぜか「ラーメン」と「群馬」について話について書いてある。「障害とか病気とか関係ないじゃん!」って。と言うか、ぼくのアドバイスどこにいったの!?って。そこから、弟って面白いと思うようになりました。いちばん近い身内がおもしろいって。そういうところでも自分の障害観っていうのが結構自分の中でがらっと変わって、リベルテでこれから考えていきたいというか、大切にしていきたいのは、障害がなかったことにしたくないことだと思っています。

障害があるからこそ、そこを楽しく乗り越えたりとか、ユーモアを使って乗り越えたりとか、悲しいからこそそれを一緒に何とかしようっていう人が集



まったり、言葉じゃないけれど自分の言葉や行動で交流しようって、そういうことを何かリベルテで考えていきたいなと思ってるんです。

で、時間の都合もあり最後の質問ですが、そういった文化とか、人が生きていくということを仕事だったりとか、街で暮らしていくときに、文化とか芸術ってどんな意味があるのかなって、皆さんの質問コーナーをつくる前に、最後皆さんにお聞きしたいなと思っています。

街で生きていくというときに文化とか芸術とかそれを通じて働いて、お金にもなりつらいけど、それはどういった意味があるのか、まとめて代えてそれぞれお聞きしていけたらと思います。

藤井 たんぼの家を訪れてくれた人が表現してたことなんですけど、その人のたとえば、階段と山のたとえだったんです。同じように、ステップとかを登っていくときに決まったルートで階段の上り下りをするのか、登山をするように、右から行ってもいいし、真っすぐ行ってもいいし、



左から行ってもいいみたいな。そういう選択肢が自分で決められているのがアートだったり、ものづくりだったり、文化というか、そういうふうな気がしています。アートが持っている意味というか。

久保田 私は、文化だと思いますけど、問いを投げ掛けることだと思うんですね。つまり、予定調和の下で、健常の人しかいなかった世帯は、同じ考え方だから、そうだよ、そうだよ、そうだよで全部過ぎるんですけど。

でも、そこに何か、それってほんとにそうなのっていう問いを投げ掛けたときに、意外に答えを持って人っていないんです。だから、障害の人とか、それから高齢者とか、要するに弱いと言われて、マイノリティと言われて人たちは問いを投げ掛けることができる人たちだと思うんですね。

そこから、ああじゃない、こうじゃないって出てくるじゃないですか。そうすると、答えは見えないんだけど、ずっと考え続けることによって、それが文化なんだと私は思っています。

哲学カフェっていうのもやってるんですけど、あれをやっているのは、文化っていうのは、さっき樋口さんもおっしゃった。耕していくことで、そこで実がなる、花がなることを望むことではないんです。望むことが意外に経済なんですよ。だから私、お金ってあまり好きじゃないんですけど。

実がなることを望むんじゃなくて、ひたすら耕すことをやっていると、誰かが種を植えたときにすごいすてきな花が咲く。見たこともないような花が咲く。それをずっとやっていくということが文化だとしたら、みんながちゃんと問いを投げ掛け、問いに答えるということをひたすらやればいい。

あと、こういう場所は本当にいいと思うんだけど、こういうところが本当の意味で創造拠点になる。こういうところでいろんな問いが生まれるし、いろんなものをみんなが持って来ていろんなことを話し合うでしょう。

こういうところが街にたくさんあるってことが、街の豊かさにつながっていくんだと思うの。それとあと、障害の人とかマイノリティの人たちがいることが、私は豊かさにつながっていくんだと思っています。

樋口 僕、おととい、地元の中学校で講演があって、普段は皆さん大人の方とか、いろんな同じ仕事をしてる人たちに対して話すんですけども。初めてかな、中学生に話すのは。

すごい分かりやすく説明しなきゃいけないなと思って、プレゼン資料をいつも使ってるものじゃなくて、あらためて使ったときに、今の中学生に何を伝えたいかと思ったときに、自分たちもそうなんですけど、あり得ないとか、意味が分からないとか、微妙って、普通に使うじゃないですか。

普通に使ってるけど、これ、何のとき使うかという、コミュニケーションを

断つときの言葉なんです。あり得ないで終わる。意味分かんないで終わる。微妙で終わる。で、次の話題。

それが普通になっちゃって、さっき言われたように、自分と共感できる話題にはどんどんって、その仲間に1人違うこと言うと、意味分かんないとかって阻害されていくということが、逆に、あり得ない、意味分かんない、微妙と思った瞬間が、一番クリエイティブが生まれる瞬間なんですよ。

なんで自分が微妙って思っちゃうんだらうとか、なんで意味が分からなかったんだらうとか、なんでこの人の表現を認めようとしなかったんだらうとか、違うと思っちゃったんだらうとかいうので、中学生に話したらめっちゃみんなキラキラしてね、君たちってめっちゃ損してるんだぜみたいな。

結局、世の中でいろんな面白い、すてきとかっていうものって、そういう瞬間の中から生まれてると思うんですよね。なんでそう思うんだらうとか、なんでこの人たちはこう考えちゃうんだらうみたいな。だから、そういう世の中にしていきたいなと思って。

それは単に豊かさとか、多様性とか言うから駄目なんです。慣れちゃうじゃないですか、多様性とか聞き飽きて。ほんとにスルーしちゃうじゃないですか。

自分が普段やってることをちょっと見直すとか、そういうところを少しずつ伝えていくということなのかと思うんです。そうすると、例えば、今人にばかにされるから表現できないとかいう人、いっぱい、たぶん中学生に

もいて、でも、その人に頑張らせて言うじゃないですか。違うんですよね。君はすてきだよ。思えと。というようなことをいろんなちっちゃいころからの関わりの中で当たり前につけていったほうがいいんじゃないかなと思いますね。

それは何をどうすればよくなるのか、今全然分かりません。けど、さっき言ったように耕すしかない。そう思う人、この土地をちょっと耕してみようぜみたいなことをやって、疲れてるから3年ぐらい寝かしてみようぜとか、そういうのをみんなで集まってやれるみたいなことを大事にしていく方がいいんじゃないかなと思ってます。

だから、僕こういう会に出るけど答えとか分かんないし、答えがあるってこと自体間違いのような気もするし、こういういろんな人たちの考えを元にして、皆さんが次に何かに従事していくということにつながればいいのかと思います。

武捨 毎年、モヤモヤしながら、自分がモヤモヤしていて、会場の人ももっとモヤモヤして帰るといのが定番になっています。定番になりつつあるんですけど、モヤモヤすることが答えになってはいけないなと、このモヤモヤから次のモヤモヤにつながる何かを、「答え(仮)」でもいいので探し出していくことを続けたいです。

樋口 いいと思います。

武捨 ありがとうございます。



シンポジウム

「この街で生きて、はたらく」

2017年11月26日(日) 14:00~18:00

シアター&アーツうえだ / 犀の角

上田市中央2丁目11-20

【公式サイト】 <http://sainotsuno.org>

キーノート① 「Good Job! プロジェクト」

キーノート② 「NPO法人まると株式会社ふくしごとと、障がいのある人の「しごと」」

キーノート③ 「認定NPO法人クリエイティブサポートレッツと障がいのある人の「しごと」」

セッション 「このまちで生きて、はたらくことをかんがえる」

Good Job! Exhibition in UEDA 来場者アンケート

Q1. 今回、展示会が開催されることを何から見聞きして知りましたか。(複数回答可)



A チラシ	9
B リベルテのSNS(ツイッター、フェイスブックなど)	11
C 知人やフォローしている団体のSNSやウェブサイト	6
D 友人や知人など	10
E リベルテスタッフから	6
F その他	7

(具体的に窓から見えたから、何をやっているのか具体的に通りかかって、バリューブックスに勤務しているので、扉の角自体知らなかった / たまたま入りました / naboで紹介されていた)

Q2. 今回の展示会で、どの企業・団体・取り組みに興味をお持ちになりましたか?(複数回答可)



Good Job! Exhibition in UEDA	
A ひょうたんカフェ	15
B ラまの	12
C futakorabo (フタコラボ)	12
D ぼんめのご	10
E Entente(アンタント・ライラ・カセム)	17



TOSHIN Good Job	
A 扉の角	23
B 認定NPO法人侍学園スクオーラ・今人	12
C NPO法人上田市民エネルギー	10
D 株式会社バリューブックス	14
E Hanalab.UNNO	8
F NPO法人リベルテ	30

Q3. 今回の展示会について、総合的にどのくらい満足していますか。



A とても満足	15
B 満足	25
C ふつう	1
D 少し不満	1
E 不満	1

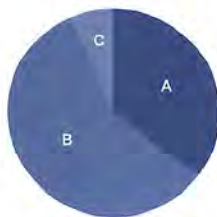
Q4. 今回の展示会に対して、前問のように回答した理由をお書きください。

映像もありわかりやすかった。いろいろなことを工夫してやっていることが知れてとてもおもしろいと感じた。長野でどんな方たちが頑張っているのかという社会資源の活用の仕方があるのかわかっておもしろかった。新しい発見と出会いがあった、いろいろのアイデアが見れた。全国のgoodjobな取り組みをしている企業団体を知ることができておもしろかった。可愛いグッズや作業にとどまらず、企業や街の活動とまろコラボしている感じが伝わってきた。いろいろな作業所、団体、組織の取り組みの一端が垣間見えて興味深かった。雰囲気が暖かくほっこりした気持ちになった。障がいがある方のアーティスト的な活動を知ることができた。ポップで市販には無い様な個性的な作品を見ることができたから。大変見やすく心がけるほのぼのした。皆さんのいきいきした感じが伝わってきた、とてもおしゃれて素敵。上田市で活動する団体や取り組みを知る機会になりました。少しのきっかけで「知る、ふれる、楽しむ、過ごす」等のアクションがうまれる大切さを教えてもらった。素敵な作品の実物が見られる機会は重要だと感じた。限られたスペースの中でそれぞれの団体の特徴がわかりやすく展示されていたと思いました。それぞれの活動や作品を、商品に興味やわき、もっと知りたい自分たちももっと頑張ろう!と前向きな毎日継続気持ちになりました。

Q5. 今回の展示会の以下の点に対して、どのくらい満足していますか。それぞれお知らせください。

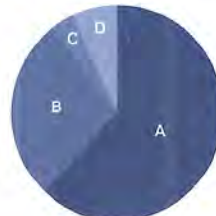


Good Job! Exhibition in UEDA	
A とても満足	5
B 満足	16
C ふつう	1
D 少し不満	0
E 不満	0



TOSHIN Good Job	
A とても満足	11
B 満足	18
C ふつう	2
D 少し不満	0
E 不満	0

Q6. また、展示会に参加したいと思いますか。



A ぜひ参加したい	18
B 企画による	8
C 参加したくない	1
D わからない	2



Q7. 今回の展示会に対してご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

チラシは前から目にしていたのですが、本日はふらっと立ち寄りましてよかったです。上田市おもしろい!住みたい!とても関心があります。ボランティアなどで参加できることがあったらお手伝いしてみたいと思いました。自分の住んでいる場所で見れて良かったです。残念ながら26日のイベントに参加できないので、皆さんのお話を聞くことができません。パネル展示のみ、見せていただきました。お話を聞く事が出来れば展示内容ももっとよく理解できたかと思えます。素晴らしい取り組みだと思います。才能を生かせる場がある、とはみんなにとって幸せなことですね。がんばってください応援しています。素敵な作品をゆっくり見ることができました。ありがとうございました。生活するために働くよりもはたらくことで生きていることを感じられるような毎日を無意識のうちに過ごせるようになりたいなあと思いました。上田はそんな人が多いですね!私も福祉事務所で働いていますので、メンバーさんの描かれたイラストを活用し、今後の支援の参考にさせていただきます。ありがとうございました。仕事への思いを知れた。面白い展示が見れて良かったです。またこのような機会があれば家族で参加したいです。事業所運営の実情なども興味があるので各地のいい情報悪い情報を知って理解を深めたいです。





Outro

巡回展にはGood Job! プロジェクト、一般財団法人たんぼぼの家に協力頂きました。またシンポジウムには社会福祉法人わたぼうしの会藤井さん、NPO法人まる樋口龍二さん、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ久保田翠さんに登壇いただきました。企画の約1年前から早々に声かけさせていただき、無理難題の企画やテーマに添えていただき、本当にありがとうございました。

同時開催のTOSHIN Good Jobとして上田市を中心に市民や企業が緩やかに連携し、今回の企画に通じる人が「生きて、はたらく」取り組みを行っている団体や企業を紹介しました。犀の角、認定NPO法人侍学園スクオーラ・今人、NPO法人上田市民エネルギー、株式会社バリューボックス、HanaLab. UNNOには、パネルの制作のみならず、自主的なSNS等でのイベント告知の協力やイベントへの参加などにも協力いただきました。展示・イベントの会場となった犀の角には、長期展示としては初めての貸し出しをして頂きました。今回も、展示会やイベントではボランティアとして地域の方や学生に参加していただきました。ありがとうございました。

改めて、皆さまにお礼を申し上げます。

福祉のデザインとアートで障がいのある人の 「しごと」を考える事業 報告書

特定非営利活動法人リベルテ

発行日 2018年3月1日

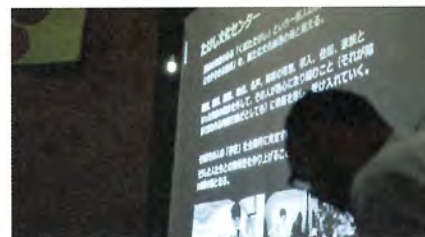
発行元 特定非営利活動法人リベルテ
〒386-0012長野県上田市中央4丁目7-23
TEL 0268-75-7883
MAIL mail@npo-liberte.org
URL http://npo-liberte.org

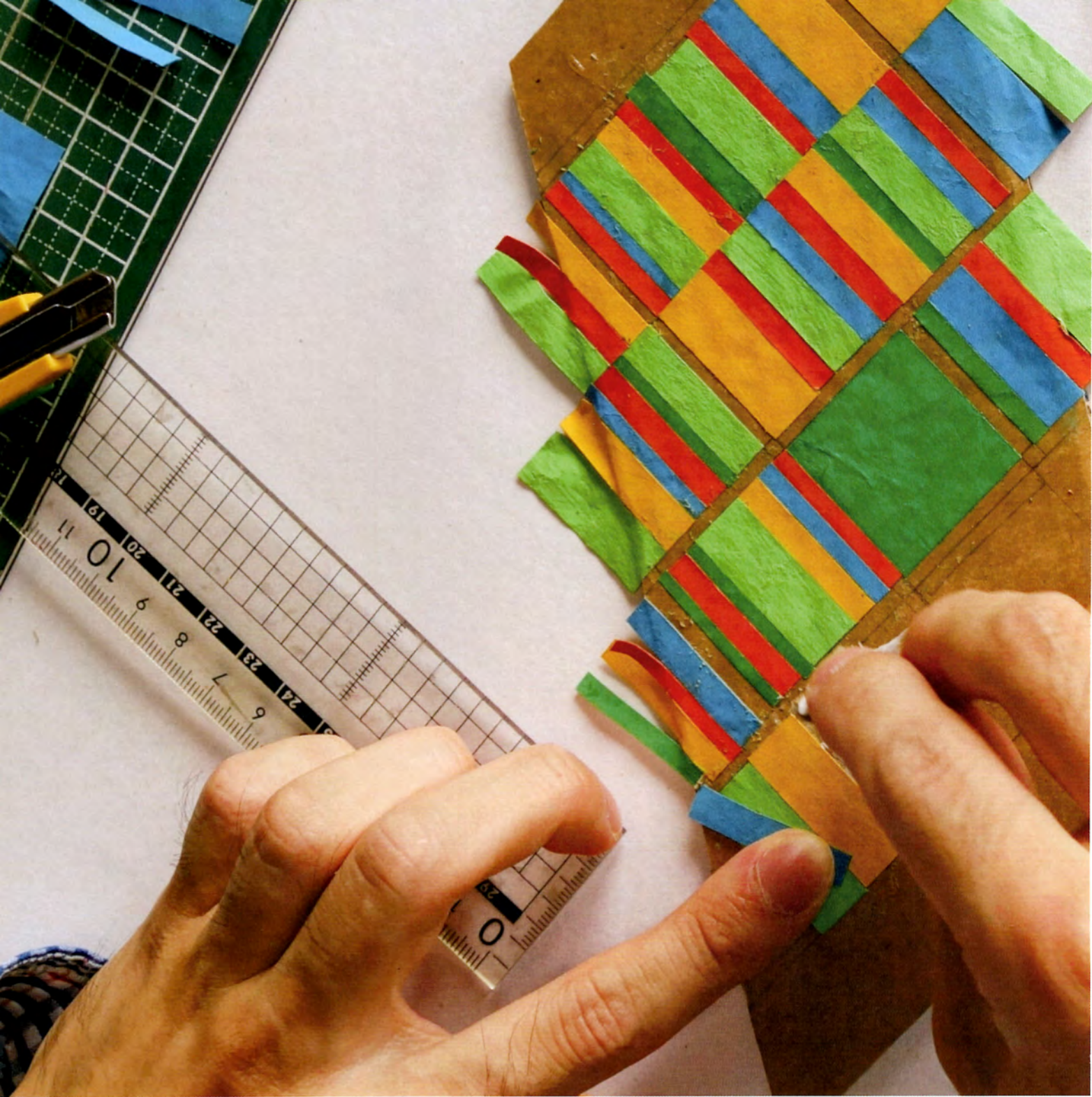
企画・制作 武捨 和貴(特定非営利活動法人リベルテ)
チラシデザイン オヤマ タツヤ
報告書デザイン 若林 広
写真(一部除く) 池上 幸恵
ロゴ ©Good Job! プロジェクト
イラスト しみずたいすけ
S.S.G.

印刷・製本 株式会社プリントバック

協力 Good Job! プロジェクト
一般財団法人たんぼの家
社会福祉法人わたぼうしの会
NPO法人まる
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

助成 平成29年度 長野県 地域発元気づくり支援金





LIBERTE